

連載コラム
東京五輪がやってくる⑥

美の競演、
「名花」から「妖精」へ



東京五輪で平均台の演技をするベラ・チャスラフスカは1964年10月、東京体育館(写真提供:共同通信社)

大人の魅力チャスラフスカ

チャスラフスカの後、リュドミラ・ツリシチェワ、ナタリア・クチンスカヤ、ネリー・キム、オルガ・コルブトといった好選手が旧ソ連から生まれ、五輪をリードした。そして、70年代に入って女子体操は低年齢化が顕著になり、世界をあっといわせるスターが誕生する。

その選手の名はナディア・コマネチ(ルーマニア)。14歳で出場した76年モントリオール五輪で「10点満点」の演技を披露した。当時の体操は今とは違って、10点が最高得点。まだ少女のあどけなさが残る彼女の完璧な演技に衝撃が走った。「白い妖精」というニックネームがつけられ、一躍時の人となった。五輪では初めてとなる10点満点で、大会の顔となった。個人総合優勝のほか、段違い平行棒と平均台で金メダルに輝いた。4年後のモスクワ五輪では個人総合の連覇は逃したものの、平均台と床運動で優勝を果たした。現役を退いた後は共産主義政権下で苦難の道を歩んだが、89年に米国に亡命して体操選手だったバート・コナー(84年ロサンゼルス五輪金メダリスト)と結婚した。

が、「ゴムまり娘」と呼ばれたメアリ・ルイ・レットン(米国)。全身のパネを使って弾むような演技を見せたレットンは、地元開催の後押しもあって84年ロサンゼルス五輪の個人総合で優勝をさらった。そのアメリカ的な健康美で商業五輪の幕開けとなった大会のヒロインとなり、テレビCMの依頼が殺到した。陸上男子のカール・ルイスに並ぶほどの露出度だった。

この後、エレナ・シユシユノワ(旧ソ連)、シモナ・アマナール(ルーマニア)ら東欧の五輪チャンピオンが続いたが、2004年アテネ五輪からの4大会はいずれも米国勢が個人総合の女王となっている。08年のナスティア・リュウキンは、父が旧ソ連の体操界を引っ張ったワレリー・リュウキン。親子2代の五輪金メダリストとなった。16年リオデジャネイロ五輪で優勝したシモン・バイルスは来年の東京五輪で連覇を狙える逸材だ。

日本勢は前回の64年東京五輪団体総合での銅が女子唯一のメダル。今回の東京五輪では18年世界選手権個人総合銀メダルの村上茉愛に期待がかかる。(後藤英文)

後藤英文 ● とう・ひでふみ

スポーツジャーナリスト。共同通信社で初代スポーツ専門特派員として1985年秋から2年間、ニューヨークで勤務。MLBワールドシリーズやW杯サッカー、NFLスーパーボウルのほか、夏の五輪などを取材。2013年から5年間、びわこ成蹊スポーツ大学の教授を務めた。

今回は女子体操の美の競演を振り返りたい。旧ソ連や旧チェコスロバキア、ルーマニアなどの国から出た名選手が五輪の歴史に彩りを与えた。まず挙げられるのはラリサ・ラチニナだろう。当時最強を誇ったソ連のエース。1956年メルボルン五輪に21歳で初出場し、団体総合と個人総合のダブルタイトルを手にしたほか、種目別の跳馬と床運動で金メダルを獲得した。60年ローマ五輪も団体、個人総合で連覇を果たし、続く東京五輪でも団体Vのメンバーとなった。得意の床運動で3連覇を達成するなど、女子選手としては歴代最多金メダルとなる9個

を獲得した。銀、銅を合わせたメダル総数18は、マイケル・フェルプス(米国、28個)に破られるまで約50年も男女を通じての五輪レコードだった。

64年東京五輪で、このラチニナの個人総合3連覇を阻んだのが「五輪の名花」とうたわれたベラ・チャスラフスカ(旧チェコスロバキア)。しなやかで優雅な演技で、日本中のファンをとりこにした。68年の母国の民主化運動(プラハの春)を支持したためメキシコ五輪への影響が心配されたが、見事に個人総合で連覇を果たした。東京では種目別の跳馬と平均台、メキシコでは跳馬と段違い平行棒、床運動で勝ち、金メダルは7個。メキシコ五輪後は旧ソ連の体制下で不遇な生活を強いられしたが、89年に民主化が成ると表舞台に復帰し、日本との交流にも尽くした。

14歳で10点満点「コマネチ

五輪史上でも屈指の女性アスリートだ。

主な女子体操選手のメダル獲得表

	金	銀	銅	計
ラチニナ	9	5	4	18
チャスラフスカ	7	4	0	11
ツリシチェワ	4	3	2	9
キム	5	1	0	6
コマネチ	5	3	1	9
アマナール	3	1	3	7
バイルス	4	0	1	5